２月３日（木）自由について
そうしないこともできる自由・均衡無差別の自由・自然必然性・神の決定論

作成者：想田瑞恵

増田さん（以下M）：前回も言いましたが、僕は共同体に拘束されているという感覚はありません。その代わりに無数の選択肢があってひるんでしまうという感じです。他の方は、そういうことを感じたりはしないのでしょうか。

想田：（以下S）：「共同体に拘束されてはいない」という表現には少しひっかかりました。確かに、住む場所や職業選択など、そう言える面はあるのかもしれません。けれど共同体が原因で生じる息苦しさや閉塞感といったものは、むしろ現代のほうが強いのではないでしょうか。少なくとも私はそう感じます。神山さんが「現代の共同体の選択は条件つきものである」と言っていましたが、これはその通りだと感じました。この神山さんの表現を使わせてもらうなら、現代は条件によって拘束されているのだと思います。つまり、以前の共同体は、多少の縛りはあっても絶対に見捨てられないという安心感があった。けれど今は、ある条件を満たさなくなれば共同体から切り捨てられてしまう。しかもその条件が、空気みたいな暗黙の了解のようなものだったりするので、なおさら息苦しいのでは、と考えています。

槍垣先生（以下H）：想田さんのように言って良い面はあると思います。ただ、増田さんの考えとは違う面を見ているようですから、増田さんは言いたいことがあるんじゃないですか？

M：「拘束されている」という感覚は、「私はもっと自由に生きられるのに」と考えてこそのものだと思います。その意味では、以前の共同体にはそういう感覚はなかったと思うので、息苦しさもなかったと言えるかもしれません。今の空気のような共同体の方が息苦しいのではという指摘は、その通りという気がします。

H：今の共同体は安定していないというのは言えるでしょうね。ただ、以前と今の共同体の違いは、拘束されているかどうかということではない。今だって拘束はされています。以前の共同体においては拘束されているのが当たり前であり、拘束と気づかせないほどだったのかもしれません。今は、それが拘束だと自覚しているという感じなのでしょう。僕が中学生のころは、「学校に行きたくないなあ」とは思っていましたけど、「学校に行かない」という選択肢があるなんて、思いつきもしませんでした。学校に行くのは辛かったし、「行かされている」という思いはあったので、拘束性は感じていたと思います。問題は「不当と思うかどうか」ということでしょう。「何で学校に行かないといけないのか」とは、当時の僕は思わなかった。今ならそう思うんでしょうね。今は、拘束性に疑問を抱けるということです。

M：そうですね。「何で学校に行かないといけないのか」と思えてしまうというのが問題なんでしょう。共同体の話に戻せば、「共同体がない」と感じることもできるので、ある意味、拘束力が弱くなったということです。

S：共同体の拘束力は弱まったんですか？

M：今は、「学校に行かない」という選択肢はもちろん、保健室登校などいろいろありますよね。そうして、他の手段、他の選択肢があると思えてしまう、という意味です。

S：なるほど。「学校に行く」という選択肢が絶対的なものではなくなり、「学校に行かなければいけない」と強く思うこともない。学校が「行きたくなかったら行かなくてもいい」という場所になってしまった、という意味で、共同体の拘束力が弱まった、ということですね。

H：拘束性を自明なものと思うかどうかがポイントですね。神山さんが、シンプルでかつ上手いまとめかたをしていました。昨年の西洋思想の授業内容とも、ばっちりつなげてくれていますし。つまり、条件つきの場合、覚悟が決まらないということでしょう。自分で選んでいるのではない方が、覚悟しやすいという気がします。自分で選んでいると、結果に対して「話と違う」など色々言えてしまう。かつては、最初から選べないものとして受け入れてしまうことができた。出生前診断が問題になるのも、同じ理屈だと思います。選べてそれでも受け入れるというなら、よりいっそう強い覚悟だとは思いますが。下手に自分が選べてしまうと、腹がくくれなくなってしまうという気がします。

S：今のお話を、共同体を選ぶ話で考えるとどうなりますか。自分で共同体が選べてしまうと、条件つきで共同体にいることになり、いつ自分がその条件を満たさなくなるかという不安もあるし、「その共同体の一員だ」と腹をくくることもしにくくなるということでしょうか。
H：そういうことになると思います。今のは「共同体の構成員である自分を条件つきで選ぶ」ということですね。「子どもを条件つきで選ぶ」という場合はどうなりますかね。いずれにせよ問題は、拘束を当たり前と思えるかということでしょう。今の時代であっても、顔や性格を「自分で選んだわけではない」とごねる人はいないでしょうから。
M：顔についてはどうでしょう。整形という選択肢があります。
H：確かにね。それでも自分が引き受けることではあるでしょう。
S：よくわからないのですが、顔は整形することもできるから、今の顔でいるということは選んでいる状態にある、ということですか？
H：その考えは、ニュートラルな自己を想定して、顔や性格を単なる属性としている考えのような気がしますね。サンデルなら、実際には言っていないですが、親から与えられた顔は自己の本質的なものだ、と考えると思いますよ。
S：でも、顔は自己の本質であると同時に、社会の窓口となる部分ですよね。社会的な評価にさらされる箇所です。そんな相対的なものにふりまわされ気に病むくらいなら、自分の属性と考えて好きに整形すればいいのではと思うのですが。
H：それで幸せかなという気はします。それに、顔が自己の本質であることと社会の窓口であることは、並列関係というより、自己の本質であるがゆえに社会の窓口になっているということだと思います。初対面の人の心は見えませんから、まず顔を見ますしね。「男も40を過ぎたら自分の顔に責任をとらなくてはいけない」という言葉もあります。それまでの生き方がにじみ出て来るということですね。だからこそ、「引き受ける」という話にもつながります。
S：顔の考え方に関しては、まだ納得しかねるところがありますが、とりあえずは大丈夫です。
H：最近は、「そうしないこともできる自由」というのにこだわらなくてもいいのかなということを考えるようになりました。決定論から逃れようと強調していたのですが、「引き受ける」とか「覚悟」ということを考えると、どうも、こだわりすぎはよくないという気がしてきました。
M：「そうしないこともできる自由」を強調しすぎると、「こうだったかもしれない私」がたくさん出てきてしまって、覚悟ができなくなってしまうということですか？そういうことなら、よくわかります。
H：「そうしないこともできる自由」が大事なのは、責任の観点からでした。決定論の考えだと責任とか「引き受ける」ということは言えないだろうと思っていたのですが、コミュニタリアンも「親に与えられた顔と性格を引き受ける」ということはしていますし、そもそも自己決定を二次的なものと捉えていますしね。今は、共同体の一員としての責任のほうを考えるべきで、自己決定は抽象的なものなのでは、という気すらしています。
M：それはカントと逆の方向ですか？宗教論では、自由から責任が生じるという話だったと思うのですが。
H：僕もそう思っていたのですが、どうなんでしょうか。確かに自然必然性からの自由というのは必要だと思います。ただ、抽象的な「そうしないこともできる自由」ということは、カントは言っていませんし、この自由はかなり論理的におかしい。カントの場合の自由は「自律」ということで理解できるのですが。自由ということでまず考えられるのは、何にも拘束されず強制されず選べるということでしょう。これを均衡無差別の自由というのですが、何かを選択するときには根拠が必要です。これはカントもそう考えていて、だから道徳法則という根拠を想定し、それに従うことが自由だという言い方をしたんですね。どうでしょう、それでもやはり「そうしないこともできる自由」というのは必要だと思いますか。
栗原さん：「そうしないこともできる自由」というのは、自分の軌跡を振り返るときに出てきますよね。自由を全面的になくしてしまうのは、まずいだろうと思うのですが。
H：もちろん全面的になくすことはしません。自然必然性に従わない自由はいるでしょう。ただ、何

にでも自由があるとしてしまうと、均衡無差別の自由になってしまうのでは、ということですね。均衡無差別の自由がネガティブなものであるというのは、西洋哲学の基本的な考えです。一応今までは、この均衡無差別の自由と「そうしないこともできる自由」は区別できると考えていました。責任を考えるために、「そうしないこともできる自由」には主体性を持たせましたから。けれど、そうした区別は本当にできるのでしょうか。
S：論を追いきれなかったので確認させてください。「今の顔を自分の顔として引き受ける」という話が先ほどありましたが、そうして引き受けるためには「そうしないこともできる自由」が確保されていないといけないのではないのですか？「整形をして今の顔をやめることもできるけれど、今の顔を自分の顔として引き受ける」ということだと思っていたのですが。
H：話が混ざっていますね。責任という観点から「そうしないこともできる自由」を考えていたのは、形而上学的な自己の話です。整形の話は、「今の自分の顔は生まれ持った遺伝子などによって決められているので責任はない」という話でした。決定論そのものに対する形而上学的レベルの自由ではなく、「できるけどしない」という自由の話ですね。今は後者は問題になっていません。整形という技術がなかった昔は自由でなかったのかと言えば、もちろんそうではなく、今の顔を自分の顔として引き受けていたでしょう。なので今の方が自由であると、簡単に言うこともできない。ここで問題にしているのは、形而上学的に、いかなる意味でも決定されていないということは必要かということですね。ジャンセニストは選択の自由を徹底して否定してますし、ルソーも「奴隷意志」ということを主張しています。ところがルソーの人生は、自己主張のし通しのように見える。誰よりも流れに逆らっているように見える人が、「奴隷意志」を主張するってどういうことなんだろうと、ずっと思っていたんですね。ポール・ロワイヤルの人たちも、奴隷意志と似た考えを持って意志の自由を否定しているようなのに、学問の自由を守るため戦っているように見える。もちろん神の意志に沿っているのは自分たちだという思いもあったのでしょうが。ただ、単純に彼らの行動を見て「意固地になっている哀れな人たち」と見なすのは、難しいと思います。「そうしないこともできる自由」に固執しないで先入観を持たずに彼らの行動を見ると、そこには自由がある気がします。少なくとも、神による決定論まで否定しなくてもいいのではと思っています。
M：神の決定論を引き受けることで責任が生じるということですか？それならカントの考えとも離れていないように思えます。
H：そうかもしれませんね。これまで何とか「そうしないこともできる自由」を確保しようとしていたのですが、先入見を取り除けば、「八日目」が本当にあるのかということは疑問ですし、広い意味での物語的自己ということでいいのではという気もしています。
M：それは「神のようなものによる決定論としての物語的自己」ということですね？かなり納得できました。
H：石田さんはサンデルよりなのでしょうか。つまり、自分の立場を引きずりながら対話をすることで多元的自己を認めていく、という考えですか？
石田さん：そうですね。サンデルと違うふうには考えていないと思います。
H：それに対してというか、想田さんは「七日目までの蝉には主体が現れていない」と言っていますね。その場合、次の「八日目」が来たときにはどうやって自己をつなぐのでしょう。たとえば、「十四日目までの自分」と「八日目までの自分」をうまくつなぐことはできますか？
S：対話において私が語るのは、それまでの自分とは違う「新しいもの」でなくてはならないという気がします。ここでの新しさとは「更新」という意味くらいで、今の自分より、この授業後の自分の方が新しいということです。その意味で常につなぎ続けていると言えるとは思います。確かにそこで生み出される新しさは、それまでの自分から出てきたものではあります。ただ、そういうものも「新しいもの」として語るためには、形而上学的な自己が必要だろうということです。
H：新しいものというのは、そんなに簡単に生まれるだろうかという気がするのですが。
S：私は別に物語的自己を否定したいわけではありませんし、共同体に支えてもらうことなしでは自己は成り立たないとすら思います。ただその支えてもらい方が問題で、形而上学的自己がまずな

いと、共同体に支えてもらうことすらできないのではと考えているわけです。
H：中島さんも「自分の立場を引きずって語る」という表現をしているから、その意味では物語的自己について思考しているコミュニタリアンとも言えるのかな。ただ中島さんは上手い言い方をしていますよね。「感情を消し去ることなく、しかし出汁にすることもなく」と。
S：「自分の立場や感情を説得力の根拠にしない」というように理解しています。確かに、内容あることを語ろうと思ったら、共同体を抜きにすることはできないです。でもどうなんでしょうか。自分の経験を引きずって語ることが対話の本質にしても、形而上学的自己という前提が必要だと思うのですが。
H：カントの言う自己を空虚でない自己として証明できるかということがポイントになりそうですね。